思春期女子における「性」の受けとめ方[*1]

――女子高校生の性意識と性知識――

大木 桃代[*2]・百瀬 泉[*3]

1 問 題

戦後，急激な社会の変動の中で，性の開放も急速に進んできた。マスコミでは日常的に性の問題が取り上げられ，書店にもかなりの数の性に関する書籍が並べられている。まさしく，溢れんばかりの性の情報が我々の回りには氾濫していると言えよう。性について人と話したり，情報を交換することも以前ほどタブー視されなくなっている。

このような傾向は，現代の若者，特に中学・高校生など10代の若者に対して大きな影響を与えている。中学・高校生の性に対する知識や意識が，ここ数十年の間に飛躍的に変化してきていることは一般に言われていることである。彼らは性に関して，量・内容共に大人たちから見れば驚くような情報を持っていることがしばしばあり，また性に対して極めて肯定的・開放的であるという報道も数多くなされている。

しかしその一方で，中学・高校生が性に対して「恥ずかしい」「神秘的」など抑制のきいた考えを残していたり（島崎，1992），進んでいると見られている彼らの知識に一種歪んだものが多いという調査（上田，1992）も見られている。

性の問題は，特に「産む性」である女子にとっては，モラルの面だけではなく，現実的・物理的にも重要な問題である。我々の日常生活には男女による多数の共同作業があるが，中でも妊娠・出産（中絶）・哺育は女性だけの役割であり，女性にとってすばらしい生の証である。しかし同時にこれは環境によっては大きな負担であるともいえよう。

1992年の上田の研究等，高校生の性意識と性行動の変化を追った研究は多数あり，その多くは女子の望まない妊娠，妊娠人工中絶などの問題を大きく取り上げている。厚生省の優生保護統計によると，1990年では中絶件数は456,797件で減少傾向にあるが，10代の中絶はこのうち32,431件でむしろ増加傾向にあり，全体の構成比は7.1%となっている。更にこれは申告された数の統計であるので，実際にはこれよりも多い数であることが予想される。また女子少年の非行問題の場合，家族関係や家庭環境に対して不満をもっている際，一種の代償行為として行動や関心を性に向けてしまうという傾向（麦島・内山，1981，伊藤，1985）も，女子の性を考えるのに見落とすことができない現実のようである。

このように，女子の性に関する問題が減少しないことの考えうる要因として，戦後以来の家族計画の遅れや少女たちの知識不足があるのではないかという指摘がなされている（柘植，

---

*1 本研究は日本教育心理学会第34回総会（1992）において，大木と百瀬が共同研究・発表した「女子高校生の性知識と性意識（I）（II）」に，大木が加筆訂正を加えたものである。性知識問題を共同で作成し，総会では大木が性意識・実態について，百瀬が性知識について発表した。

*2 信州大学人文学部 助手

*3 早稲田大学大学院 文学研究科

1992)。思春期の性に関しては，それに対する意識と知識，そして指導が重要であることは言うまでもない。思春期に彼女たちが，成熟し，アイデンティティを確立するプロセスには性の問題も当然含まれているからである。

以上の視点から，10代の女子の性に対する意識，また知識の幅・量及び正確さを調査することは，今後の性教育を考え，発展させていく上できわめて重要であると考えられる。

そこで本研究では，思春期女子の「性」の受けとめ方を調査し，今後の性教育研究の基礎的資料とすることを目的として，女子高校生を対象に，(1)性に対する意識や実態の調査，(2)性知識の発達度・正確さの調査，(3)性意識・実態と性知識との関連の検討を行った。

2　方　　法

(1)　被調査者：東京都公立の高校に在学する女子高校生141名（1年生76名・3年生64名）

(2)　調査時期：1992年2月下旬

(3)　調査用紙：第1部「性意識・実態」は，異性に対する関心，異性との交際経験，性体験，性に関する相談や情報など21項目129問から成り立っている。第2部「性知識」では，主に中学・高校の保健体育の教科書・資料集を参考にして，性に関する正しいあるいは誤った記述を作成した。これらの記述は，女性の体・男性の体・性感染症・避妊・妊娠の5カテゴリーから成る40項目で成り立っている（表1）。

(4)　調査方法：第1部「性意識・実態」では，各項目のあてはまる選択肢に○をつけさせるか，あるいは「はい」「いいえ」の2件法で回答させた。第2部の「性知識」では，各項目を読んで，正しい記述であると思えば○を，誤った記述であると思えば×を，正誤が分からなければ△を付けるという方法で回答させた。被調査者は，無記名で付属の封筒に記入済みの質問紙を入れ封印後，「性知識」問題の回答を知らされた。

3　結　　果

(1)　性意識・実態

(a)異性に対する関心は全体の81.6%が「ある」と答え，「ない」と回答した者はいなかった。(b)全体の67.4%が過去に特定の異性と交際したことがあり，交際経験のある者は1年生より3年生の方が多かった（$t=2.42, p<.05$）。しかし現在特定の異性と交際している者は全体の28.4%であった。(c)「異性と交際する」ことの定義は，「相手に愛情を抱く」「休日にデートする」「相手を尊重する」が高い値を示した。また5割強が「一緒に登下校をする」と「性交をする」に対して「はい」と回答をした（図1）。(d)過去の性行為については全体の46.1%がキスの，22.0%が性交の経験があると答えた。これらは共に3年生の方が多く（$t=3.93, t=4.35$，いずれも $p<.001$），3年生の43.0%は性交の経験があると答えた。(e)女子高校生一般の性交について「結婚するまで避けた方がよい」と答えたのは全体の19.1%にすぎなかった。「お互いに納得していれば」「愛し合っていれば」「人生経験の1つとして」性交をしても構わない，など積極的な意見を7割以上が支持した。その一方で，77.3%が「責任がとれるまで避けた方がよい」にも肯定の回答をしていた。(f)自分自身が高校生でい

表1　性知識問題と正答率

カテゴリー	番号	質問項目	正答率(%)
女性の体	7	思春期において，初経後の2～3年は月経不順であるものが，過半数に見られる。	80.1
	4	卵子は約26～30日ごとに卵巣から排卵され，卵管を通って子宮，膣に運ばれる。	70.9
	5	月経はたいてい排卵後12～16日目くらいにはじまる。	49.6
	2	卵巣は小さなクルミぐらいの大きさで1つである。	41.1
	1	膣（ちつ）はふつう長さが8～10cmくらいである。	36.2
	6	排卵がなければ，月経はあり得ない。	29.8
	8	男性には外性器と内性器があるが，女性には内性器だけである。	24.8
	3	子宮の働きは，卵胞ホルモンや黄体ホルモンの生産である。	22.7
男性の体	1	初めての射精を夢精という。	68.1
	4	精液はアルカリ性で，飲むと有害である。	64.5
	2	射精したときの精子は尿道から射出される。	62.4
	7	男性の勃起は，多量の血液が海綿体洞へ流入し，ここに血液が充満することで起こる。	53.2
	6	1回の射精に放出される精子の総数は3億前後である。	52.5
	8	射精しなくても興奮期などに男性のペニスからしみ出る液体にも精子が含まれている。	41.2
	5	1回の射精に放出される精液は普通約6～9cc（茶さじ3杯）である。	24.1
	3	精液は少しなまぐさい透明のねばねばした液体である。	17.0
性病	1	性病とはおもに性行為によって感染する伝染病のことである。	77.3
	5	エイズにかかると，体の免疫機能が低下する。	73.0
	8	性病の第一の予防法は，不純な性交を避けることである。	72.3
	7	エイズはトイレの便器からも感染することがある。	61.7
	3	梅毒にかかると，局所に米つぶ状の発疹がでたり，リンパ腺がはれたりする。	31.2
	4	淋病は女性の場合自覚症状が出るが，男性の場合はほとんど出ない。	17.7
	6	エイズの予後は悪く，発病者の90%が数年以内に死亡するといわれている。	15.6
	2	淋病は感染後半年後位で症状が現れる。	12.8
避妊	1	コンドームとは硬直したペニスを指サックのようにくるむゴムのおおいである。	96.5
	4	中絶性交（膣外射精法）は必ずしも有効な避妊法ではない。	77.3
	8	性交後間もなくであれば，コーラなどの酸性の液体で膣を洗うことにより，妊娠を防げることがある。	63.8
	5	ピルは日本の薬局でも簡単に手に入る。	59.6
	6	ピル（経口避妊薬）は，女性のホルモンのバランスを妊娠状態のようにしておくことで，排卵を起こさないようにするものである。	56.7
	3	ペッサリーとは，はしに柔軟な金属輪のある「ゴムのおわん」で膣内にとりつける。	45.4
	2	コンドームは、射精後すぐに膣から抜くと破れたりして危険なので，しばらくたってからゆっくりと抜く。	28.4
	7	避妊用フィルムは、卵巣内に進入してきた精子を殺す働きをする。	12.1
妊娠	1	排卵時期（月経開始後14日目ごろ）に妊娠する機会がもっとも多い（11～19日）。	65.2
	2	基礎体温を計るのは舌の上である。	61.0
	5	18才未満の未婚の男女同士の妊娠は，少年法で禁じられている。	51.1
	7	妊娠人工中絶の可能な時期は，妊娠22週未満と決められている。	48.2
	4	受精後妊娠が成立すると妊娠期間が終わるまで月経は停止するが排卵は停止しない。	44.0
	8	女性が月経中に妊娠することはありえない。	41.8
	6	少年の人工妊娠中絶で，親の承諾書を取ることが要求されるのは，16才までである。	34.8
	3	リズム法でいう安全期とは，高温期が続いた4日目以降である。	22.0

る間の性行為についても「高校生のうちはだめ」と回答したのは19.9%にすぎず，66.7%が「相手を好きなら性交してもよい」と回答した。また，自分は高校生のうちは性交をしたくない，と思う者にその理由を尋ねたところ，90.7%が「妊娠したら困る」と回答していた。その他に，「恋人が自分の体だけが目的になってしまうと困る」「恐い」「親に知られたら困る」「恋人に飽きられて捨てられると困る」などが挙げられた。(g)性についての悩みをする相手は「友人」が91.4%と圧倒的に多く，次いで「母親」「恋人」「兄弟姉妹」であった。「学校の教師」に相談すると答えた者は2名，「父親」は1名のみであった（図2）。(h)性についての情報は93.5%が「友人」から得ており，次いで「雑誌(87.6%)」「テレビ(70.6%)」

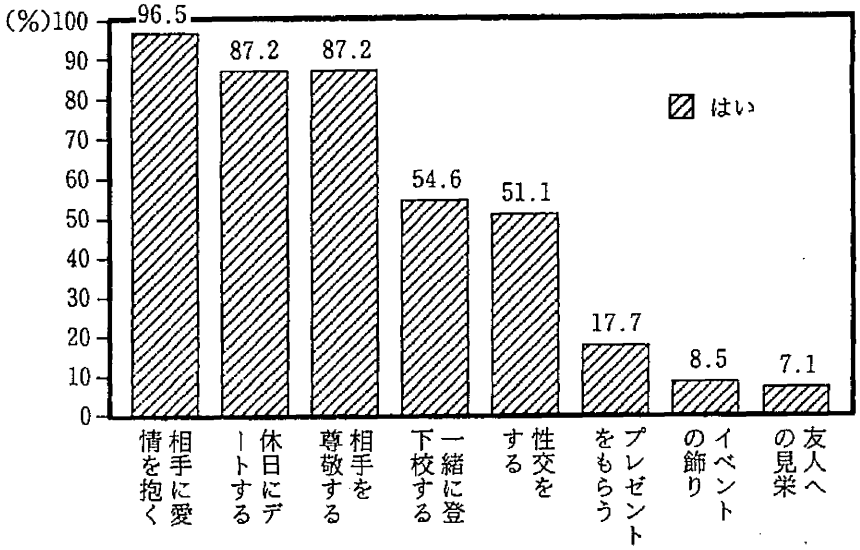

図1　「異性と交際すること」の定義

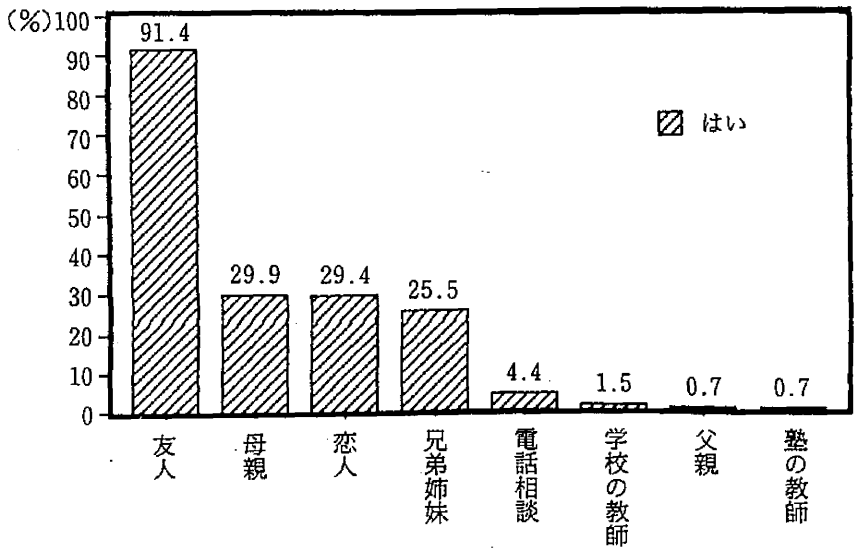

図2　性に関する悩みを相談する相手

が多かった。また「教師」からと答えた者は36.3%，「母親」からは15.6%であった（図3）。(i)今の知識で十分であるか，という問いに「十分」「ほぼ十分」と答えた者は全体の12.0%にすぎなかったのに対し，46.9%が「不足」「やや不足」と回答した。「不足」「やや不足」と答えた理由としては，「知っている知識が正しいかどうかわからない（95.6%）」「情報が

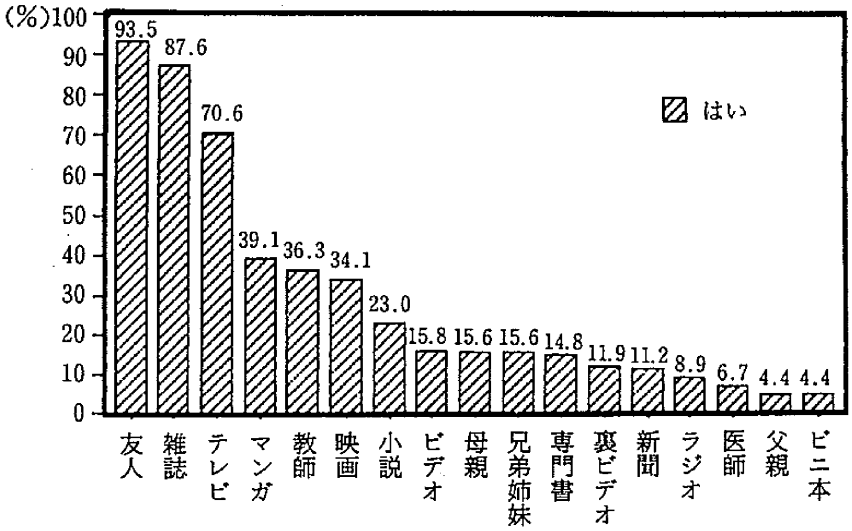

図3　性に関する情報の情報源

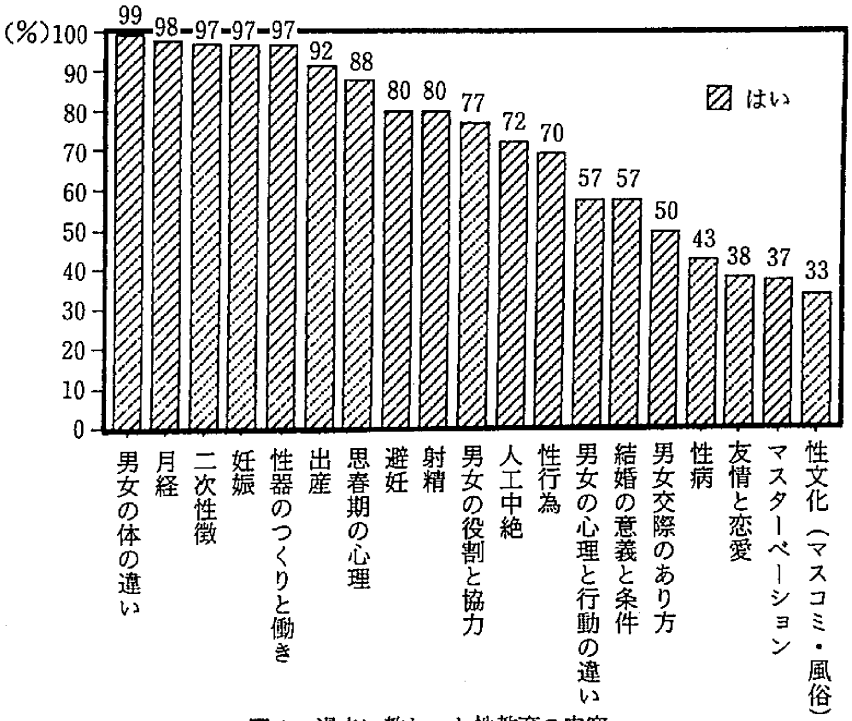

図4　過去に教わった性教育の内容

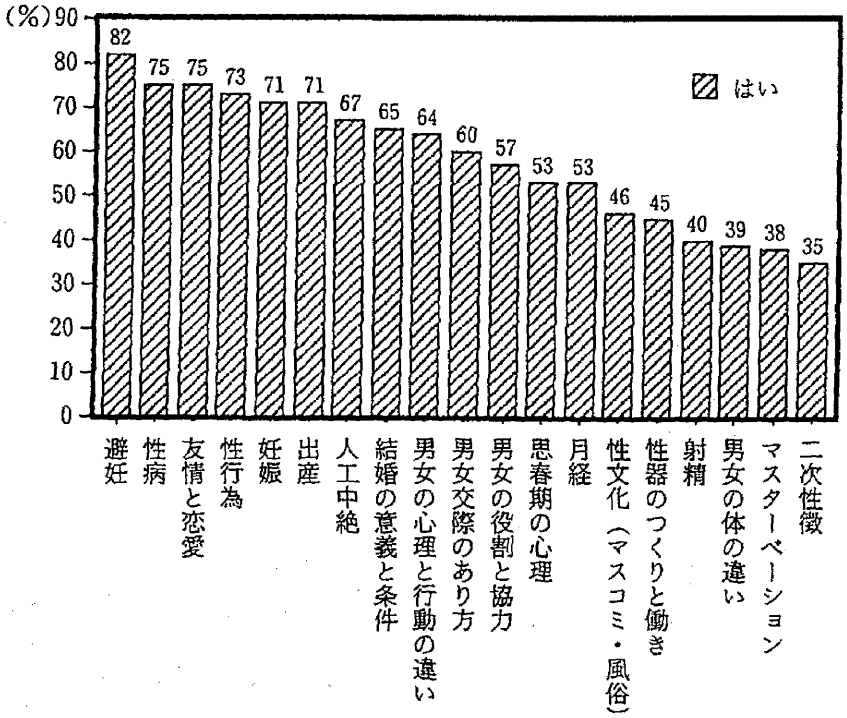

図5　教えてほしい性教育の内容

興味本位の話ばかり（68.7%）」「情報量そのものの不足（61.2%）」など現在の性情報に疑問を投げかけるものがあげられた。(j)過去に教わった性教育の内容は，「男女の体の違い」「月経」「二次性徴」「妊娠」「性器のつくりとはたらき」などであった（図4）。また「教えてほしい性教育の内容」は，「避妊」「性病」「友情と恋愛」「性行為」「妊娠」「出産」などがあげられた（図5）。(k)性に関する情報への希望としては，96.4%が「より正しい情報」，95.0%が「実際に役立つ情報」を求めていた。また，「正しく書いた書籍が欲しい（75.4%）」「学校で教えて欲しい（64.9%）」など，単に興味本位でなく正確かつ役立つ知識を求めているという結果が得られた。

(2)　性知識

各記述項目について，正解には1点，「分からない」という回答の△を含む不正解に0点を代入し，各カテゴリーごと及び全体の合計点を求めた。カテゴリーは各8点満点，全体では40点満点であった。

(a)各質問項目及び正答率は表1の通りであった。全体の平均点は19.1点，標準偏差は6.25であった。また最高得点は33点，最低得点は2点であった。(b)「女性の体」のカテゴリーは，平均点3.6点，標準偏差1.6であった。各質問項目の中では「卵子は約26〜30日ごとに卵巣から排卵され，卵管を通って子宮，膣に運ばれる」において70.0%の正答率，「思春期において，初経後の2〜3年は月経不順であるものが過半数に見られる」において80.1%の正答率が得られた。しかし誤った記述である「卵巣は小さなクルミ位の大きさで1つである(41.1%)」「排卵がなければ月経はあり得ない（29.8%）」などの項目では，正答率はすべて50%を割っていた。(c)「男性の体」のカテゴリーでは平均点3.8点，標準偏差2.0であった。誤っ

た記述である「初めての射精を夢精と言う（68.1%）」や，「射精したときの精子は尿道から射出される（62.4%）」など男性の体の代表的特徴に関しては半数以上が正答していたが，避妊に必要と思われる「射精はしなくても，興奮期などに男性のペニスからしみ出る液体にも精子が含まれている」になると正答率は41.8%に下がっていた。(d)「性感染症」のカテゴリーでは，平均点は3.6点，標準偏差1.6であった。しかしエイズに関する項目で7～8割の正答率が得られたために平均点がこれだけ高くなったのであり，その他の淋病や梅毒といった疾病については正答率は1割から3割程度であった。「性病の第一の予防法は，不純な性交を避けることである」の項目では72.3%が○を付けていた。(e)「避妊」のカテゴリーでは，平均点は 4.4点，標準偏差1.7であった。日本において最も一般的な避妊具とされるコンドームが，どのようなものであるかについては96.5%が正答していた。しかし，「コンドームは射精後しばらくたってから抜く」という誤った記述では正しく回答できたものは28.4%にすぎず，具体的な使用法になると「わからない」と△を付けるものが多くなっていた。また，女性側が積極的に採れる避妊法である，ペッサリーやフィルムについては，大幅に50%を割る正答率となっていた。(f)「妊娠」のカテゴリーでは，平均点3.7点，標準偏差1.8であった。今回の調査対象は，妊娠の簡単なメカニズムを問う質問であっても高い正答率は得られなかった。「排卵期に妊娠する機会がもっとも多い」という項目では65.2%が正答，「受精後妊娠が成立すると，妊娠期間が終わるまで，月経は停止するが排卵は停止しない」では44.0%が間違いであると正答しているにすぎず，妊娠人工中絶に関しては，承諾書が必要であることや，人工中絶がどの時期まで可能なのかについては圧倒的に「わからない」と回答するものが多く見られた。(g)知識の発達度を検討するために，1年生と3年生の両群間で知識得点の平均値の差の検定を行なった。5つのカテゴリー全体では，1年生と3年生で差があるという傾向が見られたが，有意な差は認められなかった。カテゴリー別では，学年差が見られたのは「避妊」のカテゴリーにおいてのみであった（$t=3.45, p<.01$）。項目別に見ると，「中絶性交は必ずしも有効な避妊法ではない（$\chi^2=9.49$）」「精液はアルカリ性で飲むと有害である（$\chi^2=9.83$）」（いずれも $p<.01$）「ピルは日本の薬局でも簡単に手に入る（$\chi^2=5.94$）」「ピルは女性のホルモンのバランスを妊娠状態のようにしておくことによって，排卵を起こさないようにするものである（$\chi^2=5.55$）」「ペッサリーとは，はしに柔軟な金属輪のあるゴムのおわんで膣内に取り付ける（$\chi^2=5.27$）」「性病とは主に性行為によって感染する伝染病のことである（$\chi^2=5.17$）」（いずれも $p<.05$）において，有意な差が見られた。

(3) 意識・実態と知識との関連

知識調査の高得点者（平均値＋1ＳＤ以上）27名をＨ群，低得点者（平均値－1ＳＤ以下）29名をＬ群とし，両群において差の認められる意識・実態の質問項目を検討した。その結果，「キスの経験がある（$\chi^2=18.74$，$p<.001$）」「異性と交際するとは，性交することである（$\chi^2=12.31$）」「楽しければ性交してもよい（$\chi^2=11.07$）」（いずれも $p<.01$）「自分の知識が十分だと考えている（$\chi^2=8.64$）」「相手を好きなら自分も性交してもよい（$\chi^2=8.58$）」（いずれも $p<.05$）など性に対して積極的な姿勢を表す質問はＨ群の方が高かった。一方「学校に知られたら困る（$\chi^2=10.50$）」「性交は恐い（$\chi^2=9.90$）」（いずれも $p<.01$）「自分は性交は早すぎる（$\chi^2=7.87$）」「結婚するまでは性交したくない（$\chi^2=$

7.43)」「高校生のうちは自分は性交したくない（χ^2=6.09)」（いずれも p<.05）など消極的な姿勢を示す質問はL群の方が高かった。また，今までに受けた性教育の内容では，「射精（χ^2=9.89 ,p<.01)」「避妊（χ^2=6.85)」「性行為（χ^2=6.20)」「人工妊娠中絶（χ^2=6.12)」（いずれも p<.05）の項目においてH群の方が高かった。しかし，「性について知りたい内容」については両群に差が認められなかった。

4　考　　察

意識・実態調査の結果から，性に対して肯定的・積極的な態度を示し，行動もそれに伴っている女子高校生が多くみられたことは，近年よく言われる「性の開放」が今回対象となった高校生にも浸透していることを支持する結果となった。これは従来の「性」に対する倫理感や常識と大きく異なっており，このようなギャップが今までの性教育を妨げてきた一因とも言えよう。しかしそれと同時に，性に対して大きな関心を示してはいるが，単に興味本位な情報に振り回されるのではなく，正確で役立つ情報を求めている冷静かつ堅実な女子高校生像が浮かび上がった。現在の性に関する情報が氾濫する中で，彼女たちは情報を取捨選択し，模索し，自分たちなりの「性」観を形成しているのであろう。

また，先行研究（島崎，1992）同様，本研究においても性情報を取り入れたり，性に関する悩みを相談する相手は友人が最も多いという結果が導かれた。誰にも相談できず1人で悩むのではなく，少なくとも友人間で性に関する話題を口にすることができるということは，ある意味で言えば幸せである。しかしこれは同時に大きな問題であるとも言える。本研究でも明らかにされたように，過度の性情報に取り巻かれた生活をしているにもかかわらず，彼女たちの性知識はあやふやなものが多かったからである。曖昧な知識しか持たない相手から取り入れた知識は当然心もとないものであり，正しい知識を知らないがために，特に女性にとっての悲劇が生じる可能性は否定できない。彼女たちが親や教師に相談しようとしないのは，性に対する意識の違いのために，最初から自分の考えが否定されると思っているからであろうか。それとも，「大人」というある意味で異質の者に，性について相談することが恥ずかしいと思い，一歩を踏み出しにくいのであろうか。現在の性教育が，例えば学校であれば，「教師から生徒へ」という一方的な流れになっている場合が多く，生徒側の知りたいことを教えていない可能性があることも考えられる。

知識調査の結果からは，「女性の体」のカテゴリーでは実際に自分の身体で経験している事項に関しては分かっているが，それ以外の面になると，かなり知識が曖昧になっている傾向が見られた。「性感染症」においては，最近の多数の報道の影響か，エイズに対する関心は高いようであったが，その他の性感染症についてはほとんど知らないという結果が得られた。「妊娠」については，今回の調査対象は，簡単なメカニズムですら十分には理解していないようであった。「男性の体」「避妊」に関しては，情報としては持っているが，実践的な知識となると十分ではない。「男性の体」「避妊」のカテゴリーで発達的な差異が認められた項目が多くあったことは，性教育の賜物であるのか，それとも女子の性の経験率の差であるのかは確定できないが，興味深い発見であろう。また，その他のカテゴリーでは，両群とも知らなかったため差が無かったもの，両群ともよく知っていたために差が無かったものがあ

ると思われる。

また今回は「わからない」と△を付ける回答が全般的に多く，特に避妊，妊娠などの項目でこれらの回答が目立ったことが問題視される。知らないこと，自分の知識に自信がないことの危険性は，一般の高校生においても楽観視できないのではないであろうか。

知識問題の高得点者と低得点者間で，今までに性行為・避妊・人工中絶などの性教育を受けた，等の項目に差が認められていた。これはすなわち，学校でそれなりに性教育を行なえば，それなりに知識が身についていることを示唆している。また，知識問題の高得点者の中に性行為に対して積極的な姿勢を見せた者が多かったが，これをすぐに性教育を行なったがゆえに「寝た子を起こした」と解釈するのは早計であろう。本研究の分析では「性教育を行なったので，性行為に積極的になった」と因果関係を推定することはできない。性についての知識を与えることは，少女たちの目を性に向けさせる効果の一部を担っているかもしれないが，他の多くの変数の中での相対的な大きさは言及しかねる。

キンゼイ研究所のライニッシュ（1991）は，「科学的で正しい性知識こそ，性教育の基礎である」と言っている。現在，その正しい知識を与える性教育は，家庭では学校任せに，学校では家庭任せにという傾向がないと言い切れるであろうか。

『性は個性である』と言われる。10代の女子には，彼女たちの個性をより成熟したものに促すような，正しい性の知識が必要であると思われる。

本研究の反省点としては，知識問題の全体の平均値が40点満点中19.0点と低かったことが挙げられる。今回作成した質問紙は，内容的には高校生の保健の教科書や資料に出てくる範囲を基準に選び作成したものだが，記述の仕方が紛らわしく，また知識の正確さを調べたかったためにいわゆる「ひっかけ」的な項目も少なからず含まれていた。内容的にも難しかった可能性もあるため，記述の仕方を再検討した上で，今回の問題に新たな問題を加えて項目分析を行い，より適切な質問項目を作成して追試をすることが望まれる。

更に，今回の知識問題の採点方法では，△（わからない）と誤答の区別，すなわちその知識がわからないのか，あるいは誤った知識を身につけているのかの区別はできなかった。両者を区別して分析し直すのも今後の性教育を進めていく上で役立つと思われる。特に今回の調査では避妊や妊娠のカテゴリーにおいて△をつける者がかなり多かった。この△の回答に独立して焦点をあてることで，少女たちの別の側面を発見することができるかもしれない。

また，地域差・調査時期も影響していることは否定できない。本研究の被調査者は東京都の6つの公立高校の在学者であるが，他県，及び私立高校の被調査者であればまた異なる結果が認められたかもしれない。調査時期も，特に3年生にとってはほぼ卒業後の進路も決まり，緊張の解けている時期であった。3年進級時の4，5月であればやはり異なる結果が得られた可能性もある。地域・時期などを変えた研究も興味深いものである。

以前は高校生のうちに性経験がある女子は特別なレッテルをはられていた。しかし，現在は彼女たちの間でささやかれる「高2の夏（高校2年の夏休み中に初体験をすること）」という言葉に象徴されるように，ごく普通の高校生でも「結婚するまでは」といった昔ながらの性交への倫理観念は薄らいできている。

知識問題の作成にあたり，採用した項目が性知識全般を本当に代表しているか，というこ

とも検討されねばならない。今回の研究は将来的な性教育の確立のための基礎的研究として，教科書に掲載されているような基本的な問題を採用した。しかし，現実に性の問題に悩んで病院やカウンセラーのもとを訪れる少女たちの悩みはもっと異質であり，あるいはもっと深いものである。臨床の立場からみた場合，このような「きれいごと」の質問ではなく，より具体的現実的な質問を行ってほしい，という要望が出る可能性もある。今後の課題の１つとなるであろう。

その他に，単に「教育」が必要である，というのではなく，現在行われている性教育のどのような点に問題があるのか，またどのような指導をすれば効果的なのかという疑問点も当然考えられる。これは本質的な問題点であり，系統立った性教育を促進していく上で当然検討されるべき点である。村松（1978）は性教育における早急に解決すべき課題として「性科学知識の集大成－生物学的知識を中心にすえながら，人間の性の生理学的分析と心理学的分析を深め，その特質と発達過程を科学的に明らかにする。そして，青少年に伝達すべき性知識の組みたてと適切な伝達方法を確立する」「性行動の展開パターンの把握－変化しつつある現代人の性行動の特質とその問題点を解明し，青少年の人生にプラスする性行動の積極的な展開策をたてる。そして，性行動のマイナス面…性犯罪，性被害，性病，望まない妊娠と出産，人工妊娠中絶などを予防するための具体的な対応策をたてる」「新しい美意識の探究－自然で人間的な感性および行動を回復するために，それを阻害している歴史的な偏見や社会的な障害を除去する。そして，個人の自由と責任を根底に置きながら，お互いの人格を尊重しあい，やさしくいたわりあう人間的な愛の世界を確立する」「時代に即応したモラルの開発－性的な要求や行動に関する男女の特質をふまえ，男女が対等に豊かな人間関係を形成できる現実的な生活ルールを開発する。そして，その中で，仲間や夫婦の連帯感が生まれるような方向づけを行なう」の４点を挙げている。これらの点については現場の多くの先生方が長年研究しておられることであるが，15年近く経った現在でも解決しているとは言いがたい。つまり，現在の日本ではセクソロジーが未だ十分に根付き発展していないのである。

今まで日本において性教育が体系的な学問として成立していない一因として，本研究のような基本的な研究がさほど行われなかったことが挙げられる。性教育には文献研究や実証研究などの基礎的研究と，現場からの臨床的研究の両面が考えられる。今まではこれらの一方に携わる人がいずれかの面のみを重視する傾向が見られていた。しかし，現実に性に関する種々の問題が生じている以上，医師・学者・教師・保護者などがお互いに協力し合って，それらの問題に取り組んでいかなければならない。

また，性教育を行うと，性行為を増長させることになるのではないか，という危惧の念が，今までの性教育を妨げてきた。しかし，単に禁止するだけ，臭いものに蓋をする，というような発想では，現状に対応していくことはできない。正しい知識を身につけさせた上で，どのような選択をするかは本人にまかせるしかない。むしろライニッシュ（1991）の報告のように，〝自分たちを守る手段を，子どもたちに与えていけば，その手段・方法を使って，きちんと自分たちを守ることができる〟はずである。これは本研究において実際に彼女たちが堅実な姿勢を示し，正しい知識を要求していたことからも裏付けられるであろう。

村松（1978）も〝子どもたちの直面している性の状況は，ある意味でいえば，ほかならぬおとなたちのつくり出した性の状況であるから，その中に生きる子どもたちの現実をふまえ

た上で，どうしたら子どもたちが幸福になれるかを考えるのが性の教育である。…より強い性的人格を形成し，若年性行動に伴うプラス・マイナスを充分に判断できるようなインフォーメーションを与える教育しかない″と述べている。性をタブー視したり，性教育を避けて通ることのできない現在，彼女たちの「本当のこと」「正しいこと」を知りたい，という要求に答えるべく教師やマスコミ，そして何より家庭の果たすべき役割は一層大きく，かつ責任も重大であると言えよう。

謝辞　本論文の作成にあたり，貴重な意見を述べてくれた信州大学大学院生土屋美晴氏，並びに学生の皆様に感謝致します。

引　用　文　献

青木やよい　1984　性差の文化　金子書房

伊藤冨士江　1985　性非行で補導された女子少年の性行動と性意識　科学警察研究所報告　防犯少年編，26，58-69.

麦島文夫・内山絢子　1981　女子非行少年の社会的背景と性役割認知等に関する調査　科学警察研究所報告　防犯少年編，22，163-175.

村松博雄　1978　現代日本の性教育　徳田良仁・小林司（編）　人間の心と性科学Ⅰ　星和書店　Pp. 196-211.

日本性教育協会（編）1988　青少年の性行動（第3回）　日本性教育協会

ライニッシュ，J　1991　科学的で正しい性知識こそ性教育の基礎・基本　（財）日本性教育協会（編）　現代性教育研究月報，9(11)，1-3.

東京都小・中・高校生の性意識・性行動に関する調査報告　1990　新児童・生徒の性　学校図書

柘植あづみ　1992　からだを取り巻くものが見えてきた－アジア女性会議報告－（財）日本性教育協会（編）　現代性教育研究月報，10(5)，1-3.

島崎継雄　1992　青少年とマンガ・コミックスに関する調査　（財）日本性教育協会（編）　現代性教育研究月報，10(6)，1-7.

上田公代　1992　高校生の性行動に及ぼす学校と家庭の影響　（財）日本性教育協会（編）　現代性教育研究月報，10(3)，1-5.